

三溪園に名を残す横浜の豪商

はら とみたろう

原 富太郎 (1868-1939)

原合名会社ほか



『横濱興信銀行
三十年史』より

§ 人物データファイル

出生

慶応4年8月23日(1868)美濃国厚見郡佐波村(現・岐阜県岐阜市)で代々名主役をつとめていた青木家当主久衛の長男として生まれた。母ことの父高橋^{きょうそん}杏村は南画家としても名高く、安八郡^{あんぱちぐん}神戸村(現・神戸町)で私塾を営んでいたが、同年5月に没し、富太郎はその「生まれ変わり」とも噂された。

生い立ち

佐波村の寺子屋、尚文義校、日置江村の三余私塾に通い、さらに大垣の野村藤陰の鶏鳴塾で漢籍を学んだ。明治21年(1888)上京、東京専門学校(現・早稲田大学の前身)に入学し政治経済等の新学問を修める。

実業家以前

東京で、女学生原屋^{やぶ}寿と相思の仲となる。原屋^{かめぜん}寿は龜善こと生糸売込商龜屋原善三郎^{はらぜんざぶろう}の孫娘で、両親はすでに亡く、横浜一の豪商原家の跡継ぎ娘であった。屋寿の通う跡見女学校の跡見花蹊校長の尽力により、すでに青木家戸主として家督相続していた富太郎が原家に入ることによって縁談はまとなり、明治24年(1891)中島信行(官選第2代神奈川県令)・湘煙夫妻の媒酌により、数えで24歳と18歳の二人は結婚する。富太郎は翌25年、原家の婿養子となり、原商店で店員見習いを始める。

実業家時代

明治32年(1899)原善三郎が死去すると、富太郎は原商店を原合名会社に改め、その代表社員となって経営の陣頭指揮をとる。旧来の店員には「名誉店員」の称号と十分な退職金、さらに住居や年金まで与えて円満に

退職させ冗員を整理し、その一方で広く優秀な人材を集め、経営の近代化を図る。原輸出店（のち輸出部として合併）を創設し、ロシアへの生糸輸出をはじめ、フランスのリヨンに代理店を設けて、イタリア、スイス、イギリスと貿易通路を開拓、さらに、ニューヨークにも代理店を開き、対米貿易に力を入れる（代理店はのちに支店に昇格）。

明治35年（1902）第二国立銀行（前身は原善三郎らの設立した横浜為替会社、昭和3年横浜興信銀行に営業譲渡）頭取となる。三井家所管の富岡製糸所を含む四大製糸所を譲り受けて製糸業を拡張し、蚕種改良に力を入れ、生糸の品質向上に努めた。また横浜・子安に製糸研究所を設け、自動製糸機の発明と実用化を実現した。原合名会社は生糸売込部に加え、輸出部、製糸部、地所部さらに林業部までも持つ近代的会社組織となって発展していく。

明治38年（1905）国と市共営の築港を立案、「港湾改良期成会」を結成し、桂太郎首相に直接訴えて、横浜港の拡張工事の了解を得、整備拡張が行われた。明治41年には「横浜経済協会」を設立、発会式には桂首相が全閣僚を引き連れて参列したという。横浜の繁栄のため、横浜駅（現在の桜木町駅）を高島町に移転して大船までの延伸を計画したり（駅の移転は大正4年に実現したが、磯子までの延伸は昭和39年、大船までの延伸は昭和48年によく実現）、工業招致をして鶴見埋め立て策を講じるなど、実績をあげている。また、桂内閣の財政諮問機関の委員にもなり、横浜を代表する実業家としての地歩を固めていった。

大正2年（1913）の日本夏帽を手始めに、日本リネット、朝鮮農林、南和護謨、大和鉛筆（現在の三菱鉛筆）等の事業を次々設立し、原一族および社員に経営に当たらせる。また大正5年ころから「横浜舎密研究所」を設立し、空中窒素、人造絹糸等研究させた。富太郎自身は蚕糸業を本業としたが、南満州鉄道（満鉄）、日本郵船、東洋製鉄の重役や、三井銀行の取締役も務め、日本工業倶楽部副会長としても活躍した。

大正4年（1915）第一次世界大戦による不況から生糸が暴落、日本最大の外貨獲得産業であった蚕糸業を救済するために、3月に帝国蚕糸株式会

社が設立され、請われて社長に就任する。当局と粘り強く交渉を重ね、政府の助成金500万円を得て救済策を進め、目的を達して6月に解散、助成金に純益167万円も加え政府に返納した。大正9年、戦後恐慌から第七十四国立銀行が破綻し、整理相談役として東奔西走し、平民宰相といわれた原敬首相に直接申し入れ、新設した横浜興信銀行（現在の横浜銀行）頭取に就任し、無報酬で横浜の経済のために尽力する。また糸価が暴落して生糸業界が危機に陥り、第二次帝国蚕糸株式会社が設立された際にも、筆頭専務として政府と交渉にあたり、大正11年に莫大な利益を上げて解散した。このときの利益から生糸検査所・帝蚕倉庫が増築・設立されることになる。

大正12年（1923）関東大震災により、横浜は甚大な被害を受けた。9月1日震災当日、富太郎は箱根の別荘に滞在していたが、徒歩・大八車さらには小舟を使って4日午後自宅に帰り着いた。このころから、外国人貿易商社員が神戸に移動を始め、神戸港が生糸輸出の主導権を奪おうとしていた。10日には「横浜貿易復興会」の理事長に、さらに30日には「横浜市復興会」の会長に推され、未曾有の苦難の時に、身を挺し私財を投じて横浜市の復興のために尽力した。横浜市復興会は大正15年に目的を達成し、解散する。

社会・文化貢献

古画古美術を愛好し、国宝「孔雀明王」や「閻魔天」「寢覚物語絵巻」を含む優れた名画名品を多数収集し、それによりわが国古来の芸術作品が海外に流出するのを防いだ。総数6千点とも8千点ともされる三溪旧蔵の名品の多くは、現在、三溪園内の三溪記念館や全国の美術館、博物館で見ることができる。

原家は明治35年（1902）横浜市老松町（現在の野毛山公園）から、善三郎の山荘のあった本牧三之谷に転居する。三之谷の名にちなんで「三溪」と号したとされるが、恩のある跡見花蹊の蹊との同音も意識されていたらしい。明治39年、自宅の三溪園（現在の外苑）を一般に開放する。海に臨む山や谷など起伏ある景勝の地を活かし、由緒ある古建築を移築し、滝や石など配置し造園した名庭園。「明媚なる自然の風景は造物主の領域に属

し余の私有には非ざる也・・此れを公開するは寧ろ当然の義務」（「横浜貿易新報」寄稿 明治43年3月）との考えから市民に無料開放した。大正12年には「大師会」の会場として2日に渡って17席の茶席茗筵が開かれ、「北野の大茶湯」にも比べられる大茶会として記憶される。現在は国の重要文化財の10棟をはじめとする17棟の塔や建物が点在し、国の名勝にも指定されている。臥竜梅がりようばいや緑萼梅りよくがくばいもある梅林での観梅会、早朝観蓮会かんれん、観月会、菊花展等四季折々に美しい庭園として、横浜の名所となっている。

日本美術院の岡倉天心に新鋭画家援助の意志を伝え、下村観山、安田靉彦、今村紫紅、速水御舟、小林古徑、前田青邨、また木彫家の平櫛田中、佐藤朝山らを経済的・精神的に支援した。彼らは三溪コレクションの名品を前に三溪とともに芸術論を交わし、三溪園に滞在して制作した作品が文展入賞を果たすこととなり、大正期を代表する芸術家を数多く育成した。

社会事業・慈善事業にも深い関心を持ち、恩賜財団済生会、神奈川県匡済会、横浜衛生組合連合会、神奈川県社会事業協会、神奈川県乳幼児保護協会、横浜孤児院、出獄人保護会等多くの団体を多額の寄付で支え、その人望から会長や役員に推されることも多かった。

晩年

昭和4年（1929）世界恐慌の頃から人絹との価格競争に敗れ、生糸業は衰退していく。富太郎自身の健康も衰え、親友ともいえる井上準之助前蔵相、長男の妻寿枝子の実父である團琢磨だんたくまが血盟団の凶弾に倒れる。昭和12年には長男善一郎が病死、11日後に益田鈍翁どんのう、松永耳庵じあんら、その前日には善一郎の友人の谷川徹三、和辻哲郎の2人を三溪園に招き、「浄土飯」の茶事を開く。昭和14年8月16日、病気が悪化し、愛蔵の雪舟の山水画を枕元に、自宅三溪園にて逝去した。一切の香典供花をことわり、棺を飾ったのは邸内に咲く蓮の花だけであった。享年71歳。東京日日新聞に徳富蘇峰は「思慮もあり、学識もあり、教養もあり、世間の実業家と称せらるゝ仲間では、実に群鷄の一鶴。美術の蒐集家にしてまた書画共に素人離れ」とその死を悼んだ。葬式前日、横浜市は緊急市会を開き「生前ノ功劳ニ対シ感謝文贈呈」を決める。墓は横浜市内久保山墓地の原家墓所にある。

関係人物

原善三郎 明治20年頃、横浜市本牧に山荘を築き、陸奥宗光とともに訪れた伊藤博文がその山荘を松風閣と命名した。（当時の建物は関東大震災で失われたが、その名称は現在も三溪園に残る。）富太郎に初めて会ったときからその人物を見込んで、後継者とした。

益田孝（鈍翁） 三溪が最も親炙^{しんしき}し、益田も「（原の）えらいことは到底書き尽くせない」と深い交友を結んだ。明治26年（1893）弘法大師筆座右銘を入手、大師堂を建てて茶会を催し、後には原富太郎、團琢磨、根津嘉一郎と4人で持ち回り、現在も続く数寄者の茶会「大師会」を育てた。

松永安左エ門（耳庵） 「電力王」「電力の鬼」と言われた財界人。数えの60歳を過ぎてから茶を始め、「三溪先生の茶事は創造」と高く評価し、常に先生と呼んで尊敬した。

和辻哲郎 哲学者の和辻哲郎はその夫人が富太郎の長女春子と親友で、三溪園にもよく出入りしており、夏目漱石を案内して三溪園で文人画を鑑賞している。また漱石門下の芥川龍之介は富太郎の長男善一郎と同級生で、三溪園を何度か訪れて、俳句も作っている。「笹鳴くや横笛堂の真木柱」

タゴール インドの詩聖タゴールは大正5年（1916）横山大観の依頼で三溪園に約3ヵ月逗留し、その後の来日の際にも2回滞在している。タゴールは自身が創設したサンケニ・タケーン学校に日本画の教師を招聘したいと申し出、三溪は大観や観山とも相談し、荒井寛方を派遣し、彼は任務の傍らアジャントー壁画を模写した。日本美術の紹介者フェノロサ、鉄道王フリーア等海外からの賓客も数多く訪れ、庭園の美しさ、日本美術の名作に感嘆している。

エピソード

明治・大正から昭和にかけての古美術蒐集家四大巨頭と称せられたのは、井上馨侯爵、田中光顕伯爵、益田孝男爵、そして原富太郎であった。井上馨所蔵の「孔雀明王」を高橋義雄（^{そうあん}箒庵）の紹介で富太郎が1万円で購入したのは名高いエピソード。当時の1万円は記録破りの高額であった。

若き日本画家たちの研究費は百円。月に6円もあれば生活できた時代に

「君個人の世話をするのではなく、日本の画道のために世話をしたい」と援助した。

美食家としても知られ、原家には「中華・和食・洋食」の3人の料理人がいたとされる。三溪自身が考案したという「三溪麵^{さんけいそば}」は、現在も園内および隣接する隣花苑（長女春子が住んでいた古民家で孫の開いた料亭）で食べられる。また「浄土飯」は、溜塗りの上に蓮の葉を敷き、紅の蓮の花びらを盛り、花びらの中の香飯を椀に移して蓮の実を入れた汁をかけて食べる趣向で、蓮を愛した「原の蓮華飯」として有名だった。

神奈川との関わり

横浜の豪商・原善三郎の孫娘と結婚した時から横浜に住み、「原はどこまでも横浜と生死を共にしなければならない」と語っていた。備忘録である『随感録』には「余は横浜に生存の恩を担えり、されば横浜に必要なる事件に精力を集注し、横浜に対する生活の恩、共同生活の恩に万一を報ぜんと決せり」という決意が語られている。「横浜大御所」と称された。

箱根芦の湯に別荘去来山荘を建てる。また箱根強羅の別荘白雲洞は、利休以来の大茶人と言われた益田孝（鈍翁）が造営し、三溪に絶対無償を条件に譲ったもの。三溪没後やはり無償で松永安左エ門（耳庵）に譲られた。茶人から茶人へと引き継がれた別荘は、現在も強羅公園内で茶室として利用されている。

§ 文献案内

著作

『三溪畫集』 原三溪 1930～1940 〈Yかな〉

第一輯冒頭に「此れ余が肖像なり他年余之死後余の知己親友に贈れ」とある、自作品を印刷集成したもの。没後も続いて刊行され、全6巻に及ぶ美製画集。前田青邨は「花鳥のうまさに至っては絶品といえる程」と称えている。

『餘技』原三溪編 大塚巧芸 1938 〈Yかな〉

収集してきた書画のうち、源実朝、宮本武蔵、徳川家光、市川団十郎等の絵画の専門家以外の絵画41図を編集出版した珍しい美術書。

社史

『横濱興信銀行三十年史』 横浜興信銀行 1950 〈Yかな、K〉

原富太郎の筆蹟と肖像写真から始まる。開業祝賀会で当時の神奈川県知事・井上孝哉は「之は一つの公共事業であり、特に原氏始め設立に参加した人々の義挙だと思う」と語った。「横濱興信」の名称は大正9年が庚申の年に当り、「コウシン」をもじったとされる。

伝記文献

『藝術のパトロン』 矢代幸雄著 新潮社 1958 〈Y〉

松方幸次郎、大原孫三郎らと並び、三溪にもっとも紙数がさかれている。著者は美術史家だが、タゴール来日の際に通訳を依頼され三溪園に滞在した。間近に見た三溪の思い出を「私はあんなに優しくても鋭く、度量大にして細心なる人を見たことがない」と語る。

『原富太郎（一業一人伝）』 森本宋著 時事通信社 1964 〈Yかな〉

表紙の「原三溪」の文字は本人の自筆。著者は新聞記者として直接原氏と面識があり、藤本氏の稿本も参考に、写實的に語る。なお、243ページには「昭和三十四年七月四日から同十三日まで、神奈川県立図書館で『三溪遺墨展』が開催された。富太郎の遺墨百二十点が展示されるとともに、農博藤本実也と東京国立文化財研究所長田中一松の三溪を偲ぶ講演もあった」と記されている。

『三溪 原富太郎』 白崎秀雄著 新潮社 1988 〈Y、Yかな、K〉

関係者への聞き取りや、原家の当主から借り受けた直筆の「三溪帖」「潜思録」を元に、書き下ろした評伝。三溪の姿が生き生きと描かれている。他の伝記では、若き日に跡見女学校の漢学・歴史の助教師として教え子の原屋寿と恋に落ちた、とするが、この本では「定説化したストーリー」に過ぎないとしている。本稿でもこちらを信頼する。

『近代日本画を育てた豪商 原三溪』 竹田道太郎著 有隣堂 1988 〈Yかな〉

『<生糸商>原善三郎と富太郎（三溪）』 勝浦吉雄著 文化書房博文社 1996 〈Yかな、K〉

『原三溪翁伝』 藤本實也著 三溪園保勝会、横浜市芸術文化振興財団編 思文閣出版 2009 〈Y、Yかな〉

三溪没後昭和18年（1943）に三溪翁伝編纂が企図され、農学博士の藤本實也が執筆開始し昭和20年に脱稿したが、戦後の混乱の中で出版のめどが立たず、「幻の原稿」となっていた。没後70年横浜開港150周年にあわせ、64年ぶりにようやく出版された。900ページに及ぶ力作で原三溪の全体像を実証的に表し、多くの「三溪翁伝」が出典としている基本文献である。本稿も多くこの本による。

¶ 参考文献

『横浜生糸貿易概況』明治26年～大正7年 原商店（のち原合名会社）
1893～1918 〈一部Yかな〉

生糸の市況ならびに統計（集散・入荷・輸出・地方積戻・価格等）を収録し、毎年得意先は無償配布した資料。『横浜市史 資料編7～11』（横浜市 1970-1973 〈Yかな〉）には全て収録されている。

『横濱市復興會誌』横濱市復興會編 横濱市復興會 1927 〈Yかな〉

『鈍翁・益田孝 上・下』白崎秀雄著 新潮社 1981 〈Y、Yかな、K〉

『益田鈍翁をめぐる9人の数寄者たち』松田延夫著 里文出版 2002 〈Y〉

『三溪園 100周年 原三溪の描いた風景』三溪園保勝会編 神奈川新聞社 2006 〈Y、Yかな〉

豊富な絵や写真、図版を配し、多様な関連資料を用いて充実した内容の1冊。「三溪園」は移築した古建築から岩石・草木にいたるまで、三溪自身が細心の注意で描き出した名園であり、その精神・哲学の表象とも言える。

<齋藤久実子>